

福沢諭吉は、なぜStatisticsを政表と訳したのか

奥積 雅彦（国立国会図書館支部総務省統計図書館長）

筆者は統計資料館で行う明治 150 年記念事業に関わることとなり、統計の訳字を調べるなかで、「Statistics」を初めて「政表」と訳したのは、福沢諭吉であることが分かりました。

その過程で、福沢が翻訳に関わった「万国政表」などでいう「政表」に係る文献や資料について調べる機会に恵まれましたのでその一端を紹介します。

1 万国政表とは

「万国政表」（万延元年（1860 年）刊行）は、世界の国々について、面積、人口、政治体制、生産物などが掲載されており、西洋の統計書の日本における最古の翻訳書です。「Statistics」に「政表」という訳語をつけたのは、本書が最初です。凡例において「スターチスチセ、ターフル、ファン、アルレ、ランデン、デル、アヘルデ」を「万国政表」の義としています。

初めは福沢諭吉が翻訳に取り組みましたが、咸臨丸で渡米することとなったため、岡本博卿が後を継ぎ、帰国後に福沢閣として出版しました。「万国政表」は、我が国で唯一、磐田市立図書館（静岡県）の電子書籍サービスのサイトで提供されています。

● 「万国政表」¹



【エピソード】 「万国政表」は、なぜ、磐田市立図書館（静岡県）にある？

「万国政表」は、昭和 42 年（1967 年）に、元磐田市の赤松照彦市長より、磐田市立図書館に寄贈された赤松文庫の資料の一つです。²

「赤松文庫」は、江戸時代初期から明治・大正にかけての幅広い分野の貴重な資料約 3,300 冊で、同市長の祖父である赤松則良らが所蔵していたものです。²

ちなみに、赤松則良は、咸臨丸で渡米の際、福沢諭吉らと一緒にした。その縁で、赤松則良は、福沢が翻訳に関わった「万国政表」を所蔵していたのかもしれない。

¹【画像】：磐田市立図書館（静岡県）所蔵資料（同図書館HP電子書籍サービスから転載）

²【参考資料】：磐田市立図書館（静岡県）HP「赤松文庫について」

2 福沢は、なぜ政表と訳したのか

岡部進「福澤諭吉と「スタチスチク」―校閲書『萬國政表』(万延元年・1860年)を中心に―」(日本大学工学部紀要第38巻、平成9年(1997年))によれば、「福澤諭吉は、『万国政表』から「万国ノ形勢ヲ察スル」(凡例)ことができ、これこそ世界の状況を知るには好都合な資料であると思ったのであろう。…これを(掲載項目：面積、人口、政治体制、生産物など)みると、『万国政表』は確かに「国家の状態」を示す「国勢」表といってもよいくらいで、だから「政表」と訳したのであろう。」としています。



3 政表の訳字の用例

福沢が関わった「万国政表」(万延元年(1860年)刊行)で「Statistics」を初めて「政表」と訳した後、文久2年(1862年)には、西周と津田真道^{参考1}が、幕命でオランダ留学し、その時のフィッセルリングによる五科^{参考2}学習の際の授業の道筋および講義の根本方針を記述³した「性法万国公法国法制産学政表口訣」^{参考3}で「政表」の用語が登場するとともに、西周がフィッセルリングの講義「性法説約」の巻首として起草³した「記五科授業之略」^{参考4}で「**政表之学**」の用語が登場しています。さらに、津田真道が、オランダ留学において学んだフィッセルリングの講義を翻訳した「表紀提綱一名**政表学論**」(明治7年(1874年)太政官政表課刊行)でも「**政表学**」と「**政表**」の用語が登場しています。

また、明治4年6月に岩倉使節団のため太政官で「**日本政表**」、「**日本国勢便覧**」を編集し、同年12月に太政官に「**政表課**」が置かれ、明治5年に「**辛未政表**」が刊行(我が国最古の総合統計書。以降、明治6年「**壬申政表**」、明治8年「**明治6年日本政表**」、明治11年分まで刊行。)され、これらにおいて「**政表**」の用語が登場しています。

その後、太政官政表課は、明治14年には太政官統計院となり、総合統計書である「**日本政表**」も明治15年には「**統計年鑑**」として刊行され、徐々に「**統計**」という用語が使われ始め、それとともに「**政表**」という用語は使われなくなりました。

【参考1】^{3・4}

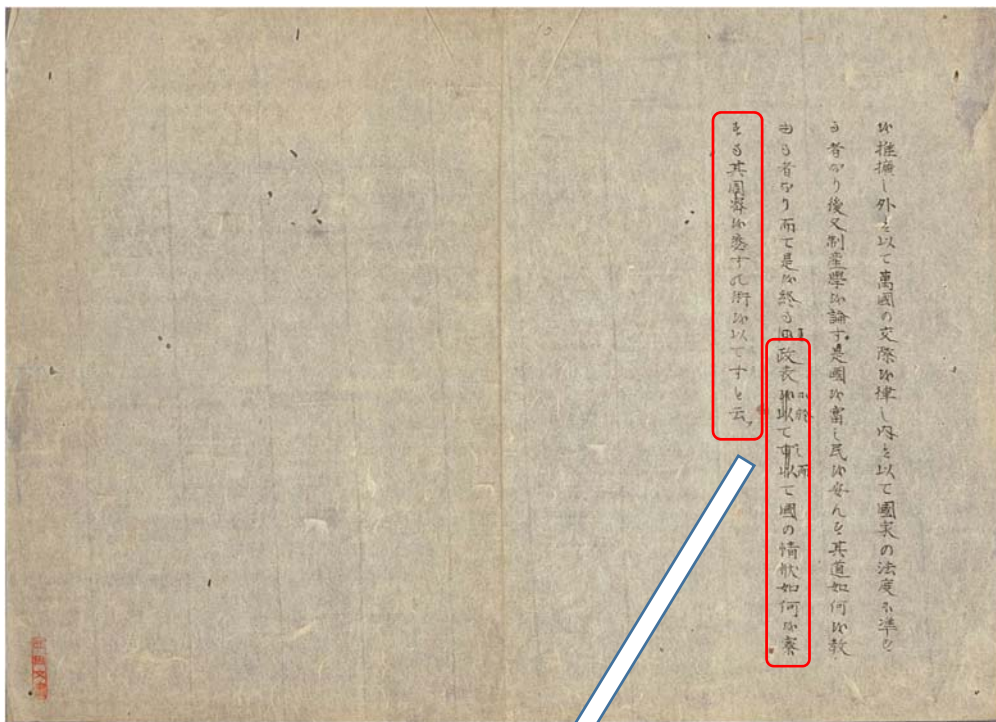
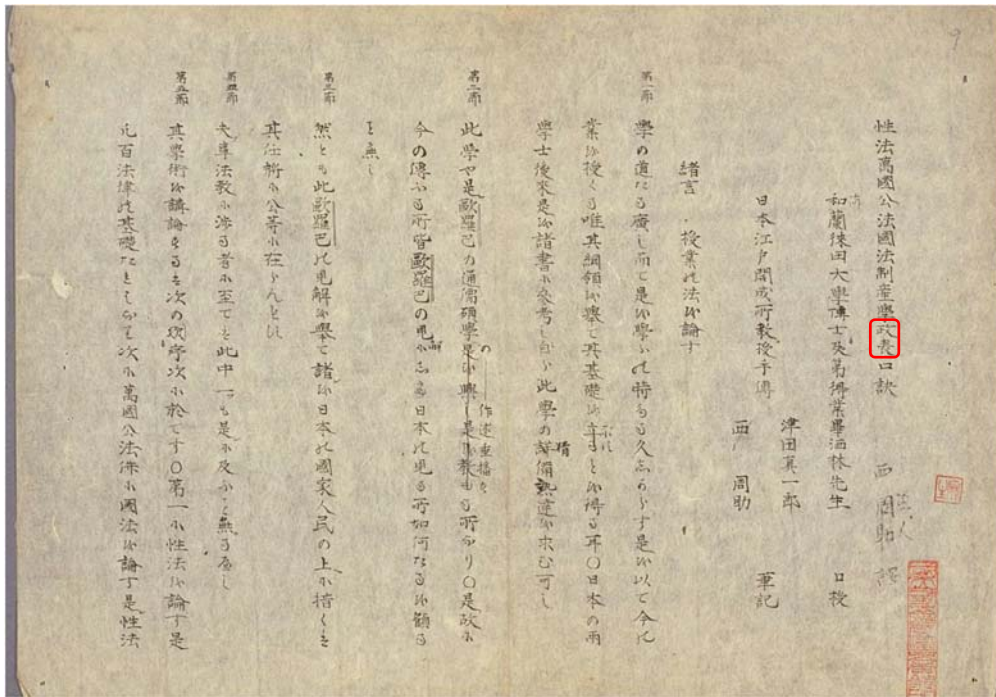
<small>にしあまね</small> 西周(周助)(1829-1897)		島根生まれ。啓蒙思想家。父は津和野藩医。藩校や大阪で儒学を学んだのち、江戸に出てオランダ語、英語を習得。安政4年(1857年)、幕府の蕃書調所教授手伝並となり、文久2年(1862年)から慶応元年(1865年)までオランダ留学。津田真道とともに自然法、国際公法等を学ぶ。明治元年(1868年)、『万国公法』を訳刊。明治3年、兵部省出仕、かたわら明六社に参加し『明六雑誌』に論文を発表。明治15年、元老院議員、明治23年、貴族院勅選議員。西洋哲学、論理学等の導入者として翻訳も多い。「哲学」などの訳語を考案。
<small>つだまみち</small> 津田真道(真一郎)(1829-1903)		津山生まれ。洋学者、啓蒙思想家。父は津山藩士。儒学を学び国学を好む。江戸に出てオランダ語、兵学を学ぶ。安政4年(1857年)、幕府の蕃書調所教授手伝並となり、文久2年(1862年)から慶応元年(1865年)までオランダ留学、西周とともに自然法、国際公法等を学ぶ。明治元年(1868年)、フィッセルリングの講義訳を『泰西国法論』として出版。明治2年、刑法官権判事、かたわら明六社に参加し『明六雑誌』に論文を発表。明治7年に統計学の講義訳『表紀提綱』を出版。明治9年、元老院議員、明治23年に衆議院議員、のち貴族院議員に。

【参考2】

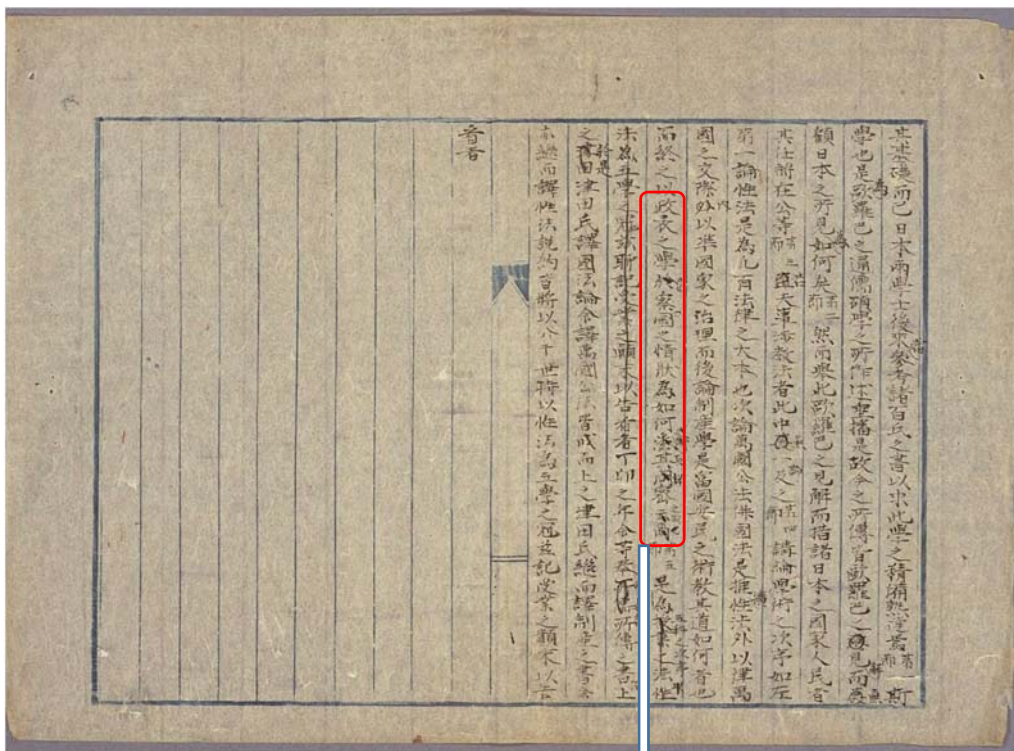
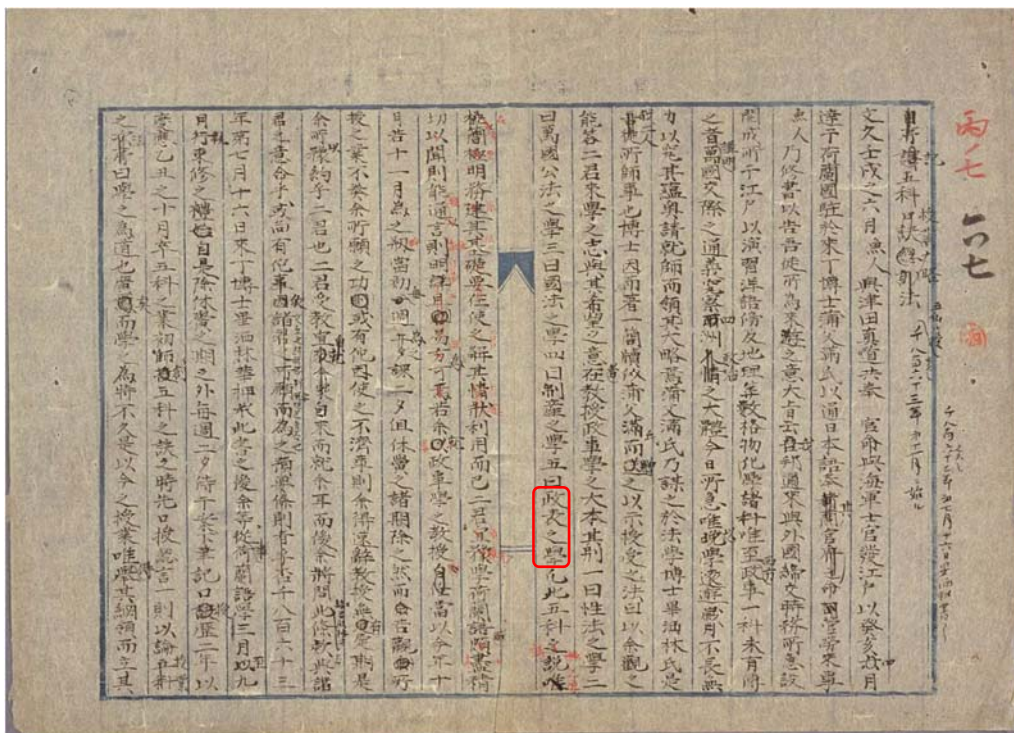
国立国会図書館HP「江戸時代の日蘭交流」によれば、「西周と津田真道の二人は、オランダのライデン大学において経済学、政治学を教えていたフィッセルリング(Simon Vissering, 1818-1888)に、次の五科目を学んでいる。①**性法之学**(Natuurregt **自然法**)、②**万国公法之学**(Volkenregt **国際公法**)、③**国法之学**(Staatsregt **国法学**)、④**制産之学**(Staatshuishoudkunde **経済学**)、⑤**政表之学**(Statistiek **統計学**)。これらを「五科」と称し、帰国後は、その講義を翻訳、刊行している。」とされています。

³【参考資料】：国立国会図書館HP「江戸時代の日蘭交流」

⁴【写真】：国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」



原文にルビを加えたもの	現代文への書き下ろし
政表に於て之 ^{これごとし} 而 ^し て國の情状如何を察する其周密 ^{その} を悉す ^{つく} の術を以てすと云ふ	政表においては、これはこのようにして国の情状がどうなっているかを理解し、すみずみまで知り尽くす方法を示すことをいう。



原文	現代文への書き下ろし
政表之学於察國之情状為如何悉其周密之術也	政表之学は、国の情状がどうなっているかを理解し、すみずみまで知り尽くす方法である。

4 雑感

「政表」は、「万国政表」の凡例のほか、西と津田の「性法万国公法国法制産学政表口訣」や「記五科授業之略」の資料から、国家（政府）の状態を明らかにする表の意味であることが分かります。

正確な「政表」は、客観的にものごとをとらえ、他の属性との比較などの実態把握を可能とし、政策目標の設定、政策評価などの基礎となり、まさに国家の統治の基本に関するものであると言えます。

5 おわりに

宮川公男「統計学の日本史」によれば、「統計という訳語が最終的に定着したことには何ら問題はないにせよ、政表という語がその有力な代替候補であった事実は、スタチスチックが単なる方法の学でなかったという統計学の発生の歴史を銘記するためにも、また現代社会において統計学が持っている真に重要な役割を再認識するためにも忘れてはならないことである」とされています。

筆者は、総務省統計局HPに掲載した統計 Today No.136 において「現代では、当たり前のように使用されている「統計」というコトバも、調べてみると明治の先人たちの熱い思い（無責任な統計の作成を許さないという戒めを含む。）が伝わってきます。そして、私たちは、このことを冷静に後世に伝えなければならないのです。」としましたが、「政表」の用語を調べれば調べるほど、「統計」は、国家の統治の基本に関するものであることを肝に銘じなければならないと感じる次第です。